

四本堂家礼下

沖縄県教育委員会

「四本堂家礼」に関する資料

『四本堂家礼』（以下『四本堂』と略記）の著者の前祝嶺親方は、童名を百歳、字を天章、唐名を蔡文溥という。蔡応瑞の長男として康熙十年（一六七一）七月十八日久米村（唐栄）に生まれる。彼は十二歳で若秀才、二十二歳で黄冠となって都通事に任命され、二十六歳で遠達理、三十一歳で座敷、四十六歳で正議大夫となって、五十歳で紫冠位の紫金大夫（親方相当位）となっている。また、二十八歳で越來間切字久田地頭職を拝授し、三十四歳の時に具志川間切祝嶺地頭職を拝授して祝嶺姓を名乗ることになる。乾隆十年（一七四五）六月一日に没し、享年七十五歳であった。家譜の中には彼が『四本堂』を編集したことを示す記録はなく、同書の奥書に乾隆元年（一七三六）とあることにより完成年次がわかるだけである。以下『四本堂』に関する若干の資料を紹介しておく。

崎浜秀明編『沖繩旧法制史料集成』第三巻に、乾隆三十年より同四十二年までの僉議が収録されているが、その中に子年（乾隆三十三）二月付けの僉議に「毎年清明之節御墓参被遊候儀ニ付僉議之事」という記録がある。これは清明祭に関する貴重な資料であるが、当該『四本堂』とも無関係ではないように思われる。というのは、八重山の石垣長夫家文書の中に『四本堂規模帳』が二冊（一冊は上下巻で光緒二年の写本、他は上巻のみ）あり、その中に左の僉議が綴じ込んでいることが確認されるからである。ただし、『四本堂』完成後三十年以上、蔡文溥が没して二十年以上経過していることもあって、どのように関連するのかは明らかでない。崎浜氏編前掲書と一部若干の異同があるので、その全文を示すと次のようになる。

僉議

此節より毎年清明之節御墓参被遊候而者何様可有御座候哉之旨御旋之趣御座候間

遂吟味可申上旨被仰付私共申談候趣左ニ申上候

御墓參之儀於唐者前代より被召行候由於御当地も世上ニ者段々致執行事候処 御上ニ右之御祭礼無御座御本意ニ不被為叶誠以難被為欠御祭祀ニ而可有御座候処何様之儀ニ而古来より不被召行候哉其訳相考候得共何楚御障ニ相成候儀共有之不被召行筋ニ者考付不申候御当地之儀前代ハ万端之御作法悉ク相立不申偏ニ御質素之躰有之候処唐大和江被遊御通融以来御政務彼是御兩國之御格式ニ被準漸々備り来たる由候得者至今も右躰御不足ニ被思召上儀ハ御旧例無御座候ても何連不被召行候而不叶第一御本意ニ被為叶間敷於世上も弥致興起積ニ而旁以御執行被遊度儀与奉存候右通被召行御事御座候ハ、極楽山御墓江も御祭祀可有御座儀与奉存候乍然彼御方江者御代參被仰付可相濟哉与奉存候且又御參謁之御次第御祭物等之儀者久米村江吟味被仰付唐御格式ニ被準御当地御分限ニ応し段々御見合を以御治定可有御座儀与奉存候

右通申談候間此段申上候以上

次に、『四本堂』の前文について、博物館本と石垣長夫家本とを校合してみると、若干の字句の差異があるだけで總体的には変差はないが、池宮正治氏所蔵の『嘉徳堂規模帳』（ゼロックス複製版。以下『嘉徳堂』と略記）とは多少異なる部分がある。以下、博物館本を底本に三者を校合してみると次のようになる。

夫国ニ者国之規有之家ニ者家之規雖有之候其規之指南無之候得者臨事而〔石本一「而」なし〕致忘却事共ニ候〔嘉本「而」につくる〕依之我家往昔より里勤来候所之礼式之内行来候与いへ共無益之事者止之可行事之洩為申〔嘉本次に「者」あり〕者増之此節規模之〔嘉本「之」なし〕帳相調置〔石本・嘉本次に「申」あり〕候間至子孫永代可相守之〔嘉本「候」につくる〕雖然人間之習ひ盛衰可有之候得者所謂在富貴者宜富貴之道行之在貧賤者宜貧賤之道行之事当然ニ候間其時之分限相

応ニ可致損益候自然至其時節誰ニ而も候へ為母もの〔石本・嘉本次に「者」あり〕
相残先祖以来之儀軽々敷改間敷杯与女姓之申立〔嘉本「出」につくる〕承儀も候
半夫ニ而者家中難統趣可申断候乍其上承引無之縦令其命〔嘉本次に「尔」あり〕
相背候共無是非事〔石本・嘉本次に「ニ」あり〕候亦者逢凶年当迫之砌も可有之
候応〔嘉本次に「シ」あり〕時儀〔石本・嘉本「宜」につくる〕致省略万反〔石
本・嘉本「端」につくる〕家法忘却不致様ニ每度此帳披見いたし心碑ニ相応聊無
懈怠可勤〔嘉本次に「候尤左之通家規相定置申候間子々孫々迄無相違永代可相守〕
あり〕者也

博物館本にはないが、『沖繩旧法制史料集成』所収の『四本堂』には右の前文の前、
石垣家本には僉議の前に左記のような一節が確認できる。

雍正四年丙午立新規不作長史者不許陞中議大夫洪永間所賜三十六姓遺裔蔡梁金鄭
林五家子孫万曆三十五年統賜毛阮二家子孫併其外中国人本国人寄籍唐榮梓紫金大
夫者子孫皆為里之子素立陞通事時加里之子御白前陞通事者許称里之子賜黄冠者亦
皆許称里之子親雲上其外不拝紫金大夫者子孫皆為筑登之素立陞通事時加筑登之御又
叙座正義大夫吟味役之上吟味役加申口御者叙正義大夫之上中議大夫叙吟味役之下
里之子素立筑登之素立雖同官御里之子素立叙上座

なお、『嘉徳堂』には、右の一節に相当する「鄭家排徳字堂名由来」「鄭家書帯草
由来」が記されている。

次に、『嘉徳堂』を検討してみると、『四本堂』系統と差があることがわかる。こ
のことは『四本堂』を粉本としながらも、従来行なわれていることと異なっておれば
それぞれの慣行に従い、関係のない項目や文章は削除し、必要な項目は加えるなどし
て、その一門の規模に仕立てる例があったことを彷彿させるものがある。その具体的
事例を示すことにしよう。『四本堂』になくて『嘉徳堂』にある事例の一、二を示す

と次のようになる。

一 子孫周年誕生日ニ者御霊前御前ニ花ひり酒飾母親装束ニ而子を抱罷出飾置候品
取させ相済候ハ、火神御観音御霊前床之上迄御酒御燈明素めん御仏供上ケ御焼
香御持仕候左候而御霊前御前ニ飾置候花ひり酒ニ而父母酌取替親子兄弟祝可仕事

附御霊前江者御茶湯上ケ申候尤盆ニ飾品者左ニ記之

- 一 書物
- 一 筆壺ツ
- 一 硯壺面
- 一 天平壺ツ
- 一 御茶の子壺対 但国米壺
升先調
- 一 右者男子之時之飾
- 一 芋へし
- 一 天平壺ツ
- 一 くら巻壺ツ
- 一 頭差壺本
- 一 墨壺丁
- 一 筭者ん壺ツ
- 一 四方盆壺ツ 盃共
- 一 簪壺本
- 一 鉸壺刃
- 一 御茶の子壺対 但国米壺
升先調

右者女子之時之飾

これは満一年目の誕生祝、いわゆる「タンカー」のことであり、品物を選ばせて幼児の将来を占う風習を示すものである。また、洗骨後厨子に骨を納めるが、その際厨子に左記のように記すことが見えている。

前面誌

某官鄭公某諱某親雲上神主 諱某室某氏某名神主

蓋并傍誌

某官某諱某號某年 干某月某日卒某號某年 干某月某日洗骨

これらの事例はその一部を示したものである。そのほかに子弟家立て行列の順序が異

なっていたり、『四本堂』で「菩薩」とか「大和神」とあるものが、『嘉徳堂』ではそれぞれ「御観音」と「床之上」となっている。祀る順序も前者は御霊前・火神・菩薩・大和神とあるのが、後者では火神・御観音・御霊前・床之上となっている。また、通礼、冠礼、婚礼、葬礼、喪礼、祭礼、雑録の中見出しでまとめられている項目も、『四本堂』と『嘉徳堂』では異なるところがある。たとえば『四本堂』で葬礼にあたるものが『嘉徳堂』では祭礼のところに属したり、『四本堂』の通礼の「年中諸礼式之事」以前の項目は、『嘉徳堂』にはなかったり、別のところに移されたりしている。このように、『四本堂』と『嘉徳堂』とを比較すると、前者が古く後者が新しいというちがいがあがるが、項目の移動や加除、字句・表現上の差異、あるいは内容上多少異なる点などが確認され、概して『嘉徳堂』の方が詳しく記されている点が目される。

なお、原本の県立博物館所蔵本は一冊綴になっているが、本影印本は暫定的に上下に分けて刊行した。

昭和五十七年三月

法量	縦二七・四cm	横二〇・〇cm
紙数	本文一四二紙	
所有者	沖縄県（沖縄県立博物館保管）	
題字	坡名城 泰 雄	

世に悉くし事

一 妻と夫が氣分を急仕りたり父母此をりり先づ哭泣
妻心とてらんらん其の髪とそり洗滌重なり新に衣裳
急ぎ袂小滌せし中希巨程と重し延と交好を
法南北に在る男女云々悲嘆事らん其の處に
津波に仕りたり其の位降しお初りり非胡と重しと
伸おふは又と津波此法海に仕り

一 父母此を果敢に時分を失治と悔をりし候て仕り
書籍有しりり其の法由新造とて用らん
徳と美とを辨り其の具と用たりともてお保りり其

一 仁徳にありて事

一 為送柔に以て為に事と重なるは師匠に於て是に當り

一 我々の所を建つて教訓中にて志せり

一 石原の事高名社考に横利本に於て後平の事

一 燒典小の事にて中にて玉板林胡に後傳因り

一 石原の事にて中にて平武人

一 以て怒る事

一 事なる事

一 為言なる事

一 其真淺なる事にて後傳の事にて平武人

他

天龍寺後之禮、心亦もて有、以、廣快、其、元、空、而、十、日、色、也、り、
其、出、礼、謝、下、一、原、事、

一 家傳、少人、之、原、入、り

一 細、之、人、之、女、入、原、入、り、之、原、養、具、之、在、洞、り

他、指、之、出、來、次、者、り、一、意、希、之、由、之、在、洞、

其、亦、不、心、不、絶、之、世、事、り、

以、之、之、之、百、脚、之、具

一 花籠、飯、之、

一 白、之、洞、之、
但、是、希、洞、質、之、由、
其、梯、亦、和、之、也、

一 汗、洞、之、之、之、他、是、是、是、辰、年

一 蘇、二、勝

一 條、二、勝

一 魚、之、之、

一 燒、明、之、之、

一 桑、湯、之、之、

一 菜花之類

是二種各異近陳之類也

一 淨豆之類

淨食

淨汁

前卓之類

一 菜卷之類 他白菜中發外

一 菜燻之類 他白菜也

一 菜合之類 他白菜

一 菜洗之類

一 菜入之類

一 淨酒之類 他白菜也

淨食

淨汁

一 菜炒之類

一 菜合之類 他洗菜中發外

一 菜花雞之類 他白菜也

此菜之類也

一 菜燻之類

一 淨菜湯之類 他白菜也

一 淨酒之類 他白菜也

一 花龍紙但是此紙不許並其不許之類以此紙之類

作入公物

一 弓人尺袋脂髮 脈 齒 丸 之類

一 麻子去其年

一 人帶去

一 鏡去

一 裁去

一 後去 但男公公用

一 多系粉念玉蕊

莫不口解其具

一 椅去考

一 角口說

一 牙木履去之

一 牙木履去之

一 法道一但女公用

一 於之年女公用

一 三子うち包一 能書具

一 木一

養月口合為具

一 角火一

一 茶一

一 茶碗一

一 茶一

一 養月品々入推業時對養平一 進り入替方打存各
下事

一 川舟師儀為介際之口一 信々

一 燈燭式之口調公去六養必志之口と之口之口也一

燒之口は之口一 口之口書之口一 今之口之口書調也一

附燈燭之書様在記

一 位牌に「書撰」之新改題考 某官某公某親之
某号府君神主也 新改題地某家屋某法名某氏
端入神主之書下也

一 由親承之りて子之りて孫傳之りて法名書撰
之入神主之書撰之りて地合之りて祖考地
法名書撰之りて也 一字も同字用之りて撰之りて入公也
多量祖然之りて法名之りて字も皆用某也地合今更改撰
行中地合之りて是地合也之りて乃重名也地合之りて之りて
同字用之りて也

一 位牌地合之りて白紙之りて上奉之りて小字之りて也

一 墓石は石の方葉重なり有し流骨仕り子孫守書
 紙合墓石は糸流骨仕墓石一言三幕下流骨
 一 石流深厨子に石網の付取骨の後壁に向り
 下流安重なり石重なり人死して流出の証なりたし
 隣者酒茶紙焼流骨仕流骨仕事

附

一 柩板に表に焼跡あり人石流骨人各灰焼墓石
 流骨流骨の地二言
 一 墓厨子石流骨胎移し流骨人各流骨
 正厨子に書記あり流骨流骨流骨流骨流骨

一 一門親教、自教、公養、山、谷、東、湯、出、家、有、送、入、教、日、
法、以、來、上、下、一、事、

一 兼、眺、く、別、浪、お、成、り、く、作、人、を、り、ま、ま、く、非、相、と、枕、を、
也、一、子、孫、皆、く、法、以、自、入、谷、施、を、仕、ん、讀、經、お、漱、以、り、
家、智、く、入、酒、と、兼、燒、火、仕、り、ら、皆、く、法、以、自、送、養、
一 仕、ん、玉、養、而、も、石、目、を、分、け、法、以、自、仕、養、日、抱、く、
安、坐、養、而、く、口、禱、平、者、多、法、燒、火、法、以、自、仕、り、
他、養、に、枕、を、せ、ら、法、以、自、陽、身、を、法、以、自、せ、め、は、ん、

送養之の記

黎國文
先序
後
同
黎國文

黎國文
先序
後
同
黎國文

炮 炮 白 旗 同 炮 同

炮 炮 白 旗 同 炮 同

出遊元

同

遊園

遊藝

遊藝

長卷

信箋
長摺大

遊藝

出遊元

同

遊園

遊藝

一

同

子孫

同

子孫

同

一

同

天蓋

子孫

念親

子孫

敬公回

一

一

敬公回

敬公希

女子

女子

女子

女子

敬公希

敬公回

女孫

女孫

女孫

女孫

敬公回

敬公希

一

一

一

一

敬公希

敬公回

親 親 親 親 親

鞏固

供 燈卷一
角子洗

家

供 自費
建

供 本履
字履

供 立
望

供 技
法

家

鞏固

羽地樓日許仕重表

秋方節系許前之時降

一 天蓋去之午

一 四流旗

一 燒燈去之午

一 燒式午但許前之時降

一 屋蓋去之午

一 瓦蓋去之午

川舟八種坊坊主傳口人々々々

一 兼眺長味一五人跡石坂石地洞々々為人友之人

一 正並地明云灯下下下下

一 兼眺く日々桑之木々蓋去去去上白旗高元基重

位牌連毎日初曉許系許地明言許各係子孫皆之

中城去去許迄之仕中

一 七日くく日く行 六く新く盛内社同在 八く清垂信結
讀經お願ひり 法燒文法在社在くす

但支居く子孫 亦くす 此處一月之燒文之仕ん

一 二指六日之長充 是月在少く之清く 垂信信盛内燒文

く者貴石月おくす事

一 一拜五日之長充 是月在定之清く 白條口指之信信之

其申く脚由之七日く日おん 讀經お願ひ牌位焚

案之白脚又之讀經お願ひり 法燒文之子孫

留く三六法在事

但焚以素之 一序之蓋又墓下束く端之此り

市燒之桑乃其日之桑と東言ふ事なる
日生息以後之方之桑乃其日之桑
秋交生息の桑と位解之也
西言ふ事なる桑乃其日之桑と
後之桑と位之也

一 百廿日之桑と云ふ日同振之事

附録

七日ノ早五日後三日ノ一桑、杉理同也
其間中出處有之也

一 桑之次日ノ早五日後三日ノ一桑、杉理同也

艾葉後天味甘且辛花汁兼湯亦佳法
一 糖之目中二三分也

他胃之嗽之者子母分三條自發此法也

一 每日早晚行氣功至七日之靈德之功

每日行氣功也

鵬

汁

小四
みぎ

汁

朔日十八日 汁

膳

小皿
みそ

汁

汁
炙肉

七日 汁

汁

汁

騰

汁

和物

汁

煮物

汁

一 父母死を四指五日の旨物久し真汁菜汁酒汁
 和酒白婦の白衣をるる居たり孝子の白衣を以て
 其汁を以て仕る物久し真汁一は陰陽交接
 の時視て之を謂ふる物真居上及喫る物也

夕眞之居迄夕眞之文胆之知く眞之居迄中ノ夕
友月皓若く初之夕眞之收以夜津金居上食酒者
下ノ夕徹——下ノ夕辰迄礼ノ夕見居中ノ夕
津之兼津酒居上之夕迄之居迄之夕母知居上之夕
夕之夕消候炭之夕津事

附錄

一 月居之夕叙又母若兄夕姉妹死云附因格之夕
四拾五日夕津之夕夕次日津兼之夕夕津兼之夕夕
夕月夕之夕居上日之夕夕津兼之夕夕津兼之夕夕
夕居上之夕津之夕夕津兼之夕夕津兼之夕夕又

上はむと仕はるる父とて是れ母の後とてなりぬる事と
下は八雲居之日は縁の事今日又と横に遠上の後
とと且又又と神と神と云と下とと云と神居の事
何月何日と云居之日と云居縁の事今日母と神と云
横に遠上の下と神とと神居の事福と下と下と右の事
汁酒と云と云と云と汁酒と云と云と右と云と云と
お教と云と神と云と右と云と云と

附録

- 一 香く水着然式目分りなり
- 一 粟とく書換はむと云と云と云と云と

一 父母喪云々均二年十一月八日忘日之儀也
死時系之男女大喪後之儀也

一 七日くく一年節婆之儀板之儀洞葬之日より二拾
二年忘連之一年節婆之儀板之儀洞葬之日より

一 從七日くく三年節婆之儀板之儀洞葬之日より
二拾六日葬之日より子孫男女大靈前之儀也
終末之儀礼之儀記之儀也

一 歳事之儀父母喪之儀也

一 本宗方若年歳方之儀父母喪之儀也
死云々付之儀也

系會之時叙又歲考たりとくも歳是之始と
上之禮とらん是又為神地たりと
其洗骨之事

一 又母死を六年之成りりて四月分又母之歳美
節とて歳書并曆也中にお新洗骨之日日時
巻くは明公年とあり久見合とて之日分又巻くは
系書並月日とて掃地とて正正日とて子と下知人
乃老飯屋示地とて神座掃地分とて出^前たりと孫男女共
白布蒙ると系書並月日分入即神座注し骨飯屋とて
子孫等とて巻くは月日入即神座注し骨飯屋とて

深乃之為深沈者一之故之與持之頭髮之厨子之白細
厨子之髮之口之白頭骨之後生之白之之深也之
棺板之之髮之之燒之之灰之之髮之之深之之深也
在之之髮之之口之白之之深也之之深也之之深也
其後髮之之口之白之之深也之之深也之之深也
仕之深也之深也之深也之深也之深也之深也
池之之深也之深也之深也之深也之深也之深也
之之深也之深也之深也之深也之深也之深也

云地之深也之深也

一 地之深也

一 深也之深也

一 秋武肺

一 生魚一喉

一 冠鳥一雄鳥

一 沖菜湯去之魚

一 貝之類一沖他二天

一 小刀去之牛

一 沖洗者沖菜之他也

一 沖酒去之魚

一 秋武肺

一 肺

一 肺武肺

一 向之肉去之切

一 之年牛母二肺

一 沖香

一 地一碟

一 貝之類一沖他二天

他切調法秋
号年

一 沖酒去之魚

一 秋武肺

一 冠鳥去之雄鳥

一 中負去喉

一 吐卒由武降

貝之教去所但一又

一 冲日未湯去之

一 地古之碟

一 冲香

一 之之唐旅振救 但切詞演叙行年

一 冲金脈終之去之

冲汁 集
冲食 之由之之聖命

一 海之流背有者之 冲之百路之厨子一先之入家之

史之之先柳厨子大分之出散卷示乃室之トト

存心并办教流背之冲之厨子办改史为四之

厨子一先之入家之乃白乃乃和之史之骨右集之

骨之右之入乃死去之乃流背之乃有之乃史

一 骨子右之入重事

他函より後由尉子云云の事は子孫に及ぶ尉子

に成りし右洞柳尉子より宗若松書寸法

記

宗若松

屋久松より新之洞

他松梅の厚文

一 新巻仕立

一 出来代子孫の巻仕立より宗若松書寸法

所立婦中一日地公口之味上致燒以与婦中
然之味之徳为八沈青之時公地公茶之徳由日
一莫成能之時公日撰及公信徳之清上供表其徳
其歎或后記之

新し玉の時師

一 香煙云々

一 生花云々

一 沖菜湯云々

供養の時師

一 香煙云々

一 香云々

一 焼物云々

一 漬菜云々

一 沖香云々

一 一生花去多少

一 且看暮色

一 方寸心所

一 冲酒去多少

右之世如脚 长先 读 经 与 济 以 均 之 皆 之 思 及 过 以 少

但长先 冲酒去多少 二 冲酒去多少

一 右之世如脚 长先 读 经 与 济 以 均 之 皆 之 思 及 过 以 少

一 逸 葬 之 中

一 则 爱 暮 亦 非 死 义 母 之 肯 逸 中 却 之 说 骨 葬 之

亦 且 授 月 命 之 日 亦 亦 暮 亦 亦 系 冲 酒 去 多少 冲 酒 去 多少

一 能 明 之 多少

一 亦 之 说 去 多少

一 冲 酒 去 多少

一 冲 酒 去 多少 但冲酒去多少 纲与多少

新巻は汁膏福と云ふ。多分汁薬用重玉と云ふ日
 あ疎男女各皆く白紙敷之なる。汁焼文は白土薬水
 くと明厨子とある。連——男は厨子と云ふは女後之体
 當と氣心と交——新巻中云云く、新刊の新巻
 おて厨子城ある重玉供焼出。此の法經之法式
 水漬はりて云燒云云重玉と云ふ條上出。燒云云は左なる
 出。此の法汁汁一入。この法は是合會亦飯と云
 汁焼文系子と云ふは又合會亦飯と云ふ。此の法は
 中——と云ふは、此の法は、此の法は、此の法は、
 卷之百と云ふは、此の法は、此の法は、此の法は、

但三未信地沈骨之時分

一 父母遷葬之時子之三月之忌往也家祀之者之由也
日之月之臨之日也喪下終也

一 父母葬之時人未沈骨之時月死之者之由也

其地之隆者以調液燒のる沈骨仕祭之者之由

厨子之金屋後之吏婦也人々の厨子戸調三連下ノ子

一 曾祖父母遷葬之時也沙のる南系祭之言葬重

ト分祖父母遷葬言其骨と魂墓内上極之西面

穴地之元也ト分及ト分其厨子之也ト分ト分ト分

為存知書記の中

喪礼之事

- 一 父喪致祭之日、母ハ躬ク自白麻衣ヲ着テ泣キ居ル事ト云フ又亡後、親類同族ノ依弔、父如見、其志中ニ在ル者、同族ノ婦女子ノ女房等、皆泣キ居ル事ト云フ
- 一 父又自婦、病氣ノ初、婦女子ノ妻、亦如也
- 一 凡忘中ニ持、家人、未レリ、白麻衣ヲ着テ、泣キ居ル事
- 一 凡忘中、月ノ辛、泣キ居ル礼、若シ、親類、同族、其志中ニ在ル者、亦如也
- 一 凡忘中、月ノ辛、泣キ居ル礼、若シ、親類、同族、其志中ニ在ル者、亦如也

後正和是系以幾年頃之節云云亦能存至
久之至年頃之頃生靈之方以是系以幾年頃之
是又中夜之及也

一 女房若姦共男姑之三月内之及也正月半盲疾
七月八日十日十一日之米酒持系之先祖之靈也
燒火之仕以其外之世用之

一 父母之忘中暮米之厨子之厨道之忘也

一 忘中之御遊中若於暮雨男女共之於之云云
下之也又於之云云知之口訣則女中六親友
下之也

一 忘れ拵日中一殺生仕つる者

一 同力拵日中一夫婦一寝座訂控する

一 同力拵日中一男一書寫とある女一女一仕事

他女一仕事

一 拵目一忘情一忘月一自一門一教教一百年四一

一 拵目一忘情一忘月一自一門一教教一十年四一

一 拵目一忘情一忘月一自一門一教教一十年四一

一 拵目一忘情一忘月一自一門一教教一十年四一

一 拵目一忘情一忘月一自一門一教教一十年四一

一 拵目一忘情一忘月一自一門一教教一十年四一

何れ一不為也。良以良時。宜所為。之。仕。公。自。身。之。所。出。也。以。其。宜。作。也。

一 忘月角位頂戴仕法。及。自。校。度。之。系。以。人。位。能。以。忘。月。之。月。之。年。及。沖。深。之。時。為。祿。人。也。新。酒。代。為。也。其。六。何。能。一。美。也。良。也。治。也。之。仕。公。身。之。所。出。也。其。六。何。能。一。美。也。良。也。治。也。之。仕。公。身。之。所。出。也。

一 女房女子之云。一。致。致。當。方。忘。月。之。月。之。年。及。沖。深。之。時。為。祿。人。也。新。酒。代。為。也。其。六。何。能。一。美。也。良。也。治。也。之。仕。公。身。之。所。出。也。

一 又。亦。能。云。之。治。之。年。中。元。後。若。嫁。娶。之。仕。公。身。之。所。出。也。其。六。何。能。一。美。也。良。也。治。也。之。仕。公。身。之。所。出。也。

一 忘中於日之為之數子

一 鄭君之二男之男又母死後亦成苦死云云此等忘

月中致礼云云下り此等忘中於日之為之網致之理

靈祐云云下り此等忘中於日之為之網致之理

下り此等

一 春日之忘中於日之為之數子
忘中於日之為之數子
忘中於日之為之數子

附錄

一 父母之喪云云二年之喪云云此等忘中於日之為之數子

有之此等忘中於日之為之數子

在^礼祀之日忠臣義士等為之發願者出各處者ありて
上代相于以後二年、其日先祖を奉祀せむ
於唐の人の厚二年、進上るに於て忘れず
先祖を奉祀せむと雖も、其の功を二つに
分ち、其の功を一年に充て、一月に
宗子をして奉祀せむとす。其の功を長く奉
祀せむに、其の功を二年に充て、一月に
奉祀せむとす。其の功を二年に充て、一月に
奉祀せむとす。

一 表孔^三后^一、其の功を二年に充て、一月に奉祀せむとす。

俗そへ一有疾則酒と飲肉とを不食之にして血
如て養ひし及酒も少く肉も少く食らるゝと
六七杯成て一食無不養ひし及養麻と後難と力
飲酒を炙肉とを食は曲礼に有るなり

但獨と一才と疾教と一才と瘦し事

一厚目と尖りたる疾事養也玉運記に有るなり

一も日毎のりく男計の養病女と云ふ事

一嫡子の子孫を多孫祖文と云ふは仕りて重親有る事
一志仕に遊礼と云ふ事

一夫と志を病日則と云ふは仕りてその日より一なる事

忘下口一也

一 父母死後、近日郵信、他叔父母兄弟姊妹、皆嘗
死を以りて、白麻布、念珠中、に糸、泣き悔し、入
て、泣き、下す

他、果、職、糸、以、後、之、後、を、画、以

一 亡後、宗族、より、行子、を、成、以、久、に、生、に、父母、終
死、を、以、り、正月、に、祿、福、祿、を、押、賀、礼、不、勝、以、目、
下、仕、以、忘、月、に、自、賀、礼、を、請、以、中、に、

奉礼

共、九、日、に、奉、之、也

一 素礼ニ誠意と平素ニ平一以名節を信良忘日
又去年忘ノ時分一日より身戒体落り中一取對云
仕る友の及種に於て翌日其外素礼ニ誠意と云
後悔ニ誠意と云

一 允素礼ニ誠意と云一は仕る素礼ニ誠意と云
介際亦其名を存隆と云一は其不能多
鬼非字も一は書寫と云一は

一 一冊ノ素二八月ノ素合秋分ノ日夏ハ夏也ノ日
冬ハ冬也ノ日一素ニ誠意と云一は其日ノ素
誠意と云一は其日ノ素ニ誠意と云一は其日ノ素

一 右津祭儀之三日津靈前於法橋本何日法祭
 下仕也法祭用下下之公也西日之祭之者子身子之
 紀之自水老月製法祓胡新抹地墓主之生花
 焼明之上香焼也祝文飾津酒法祭之左之菓子
 之三飾之法飾津法之之執事之及入卷之右在
 之系之於燒也降祓津法仕何之左之執事之酒
 之次系之右は授系之法水頂何之右之執事右授十
 津靈前何上何津法何仕何右何津法之上何
 吉新理之く何の法法仕何何又何之執事何系法
 系之右は授系之何之右之執事右は授津靈前何

乃之汗血使事以石名味親文若紙焚石少人汗菜
清酒汗彩彩理之神之液燥口香之山石床之屋安月
南之角口燒り重之怪吹と拾石と戸

附錄

汗靈ふ石と名部

汗解

汗解

春の初山
夏の子
夏の子
秋の子
冬の子
冬の子
冬の子

中奠物

春ハクニ肉

夏ハクニ肉

秋ハクニ肉

冬ハクニ肉

一 一ノニ唐紙三枚ニ投

但祓胡或可合

三ノ及自ニ夜四ノ中一ニ注シ其ノ在格致ニ云々

祭文式

維

中汁 奠ニ施スルニ云々

幾年歲次于支幾月幾日于支孝玄孫文溥敢昭告于

顯高祖考某官某姓名某親雲上某號府君

顯高祖妣某安屋某法名某氏

顯曾祖考某官某姓名某親雲上某號府君

顯曾祖妣某安屋某法名某氏

顯曾祖考某官某姓名某親雲上某號府君

顯祖妣某安屋某法名某氏

顯考某官某姓名某親雲上某號府君

顯妣某安屋某法名某氏 歲序流易時

維春秋分夏至追感歲時不勝永慕謹以酒饌祇薦歲

事 尚 饗

維

玄孫奉使在外併有病時長男代祭祝文式

幾年歲次于支幾月幾日于支孝玄孫使長男某
執其常事敢昭告于

顯高祖考某官某姓名某親雲上某號府君云云

一 祝文詞中「時」字及「某」字等處

一 三、五年、月、日等字及祖考系譜在左位、後、右、左

其精之或教の事も心入の言を案の七十年集に
有るは自ら知て有る

一人は然るは地之秋暮も神魄安於廟之神魄
裏に人年集に有るは自ら知て有る

一先祀祭の事何れも祭に孔子は信じて又時法に
月あるは自ら知て有る

舟中先祀の事何れも祭に孔子は信じて又時法に
祭に孔子は信じて又時法に祭に孔子は信じて又時法に
祭に孔子は信じて又時法に祭に孔子は信じて又時法に
祭に孔子は信じて又時法に祭に孔子は信じて又時法に
祭に孔子は信じて又時法に祭に孔子は信じて又時法に

作ふ百々之考之茶餽し。胎継の條者親教
海入濱而杯之水送以濱上宜公之次以之新水以濱
下官送杯之水用之杯の正海中入教之上下各
下茶餽賞既仕候之公下自中の方へ候一完之
並中世下杯之次公之教之先祖之意書り候中
及中御之白紙展書仕中御之公下之公下之公下
條書之有之正之公下之公下之公下之公下之
一先祖條之正之公下之公下之公下之公下之

三志日の中

高倉祖考著願位牌忘日之日之公下之公下之公下之

掃地臺上一 位牌祚棚西面上 生祀地明法祭
清酒三汁一 兼上 法進供上 同辰上 子孫男女
法進供事

附錄

一 其一日ハ素食上 致公表自地上 祝儀上 法進
玉衣蒙ハ白衣上 兼上 祝儀上 法進上 兼上 法進上

維

幾年歲次于支幾月幾日于支孝子某
或孫之云 敢

昭告于

或曾孫

某親某官府君歲序流易諱、復臨追遠感時昊

天罔極

如祖考妣改此句為不勝水慕

謹以酒饌用伸真獻尚饗

一 君子有終乃不廢日之志也

視之思不家也其有之也仕也

其有之也仕也

一 庭一法親之忘日之志也

敬之也日也冠也衣也

年之志之忘日之志也

多入於平某振言也仕志也

以也矣日之日撥見台法事仕志日之志也

中道正法海に仕奉

一 父母忌日又も厨に糸を煮居る子も酒持来り酒持来り
て仕奉む忌日一日ハ素食を白装に仕奉

一 母之老喪隱居に祈る云先祖命に續存余中ハ

自身に於て

三年忌に事

一 一年忌に初七日迄に月外に掃地前二日ハ家

墓下中東法城に法業月ハ中道正法海に仕奉次日

中道正法海に仕奉法城に仕奉先祖年回忌に

中道正法海に仕奉一方に安んず法に中道正法海に掃地

仕奉をせん或は此の仕奉に仕奉る事
久しき早禱を以て徳を以てせしむる事
之の仕奉に業湯法候其法毎仕奉を視て
仕奉りて申す候事と申す候事

附録

津霊供之部

和物

津炭物

津汁

深物

津籠

津食

淡物

津汁

中物

一 花籠版

他古本各

一 文龍卷

他葉子巻各

乃

古本
各本

素人
抄本

乃の各本各本各本各本

一 正日の子と母とがなす中 壺ふくは生花はしと

古焼文法海平 一 壺ふくは生花はしと

下

一 長老の初次と水漬りて遊む中一と老成一と親教

子孫延年法身法記子巻 内古入法出解巻

葉^三 中酒と次^二 敬^一 といはれ 授頂^り といふ 小^一 巻^二 といふ 巻^三 重^四 の
 酒^一 巻^二 の 石^三 の 巻^四 の 巻^五 又^六 古^七 真^八 と^九 言^{一〇} 一^{一一} 授^{一二} 頂^{一三} の^{一四} とい^{一五} 留^{一六}
 存^{一七} といふ 中^{一八} 酒^{一九} といふ 同^{二〇} 酒^{二一} といふ 授^{二二} 頂^{二三} といふ 時^{二四} 二^{二五} 教^{二六} 授^{二七}
 一^{二八} 方^{二九} 方^{三〇} 重^{三一} 會^{三二} 龍^{三三} 巻^{三四} 九^{三五} 酒^{三六} 代^{三七} 三^{三八} 巻^{三九} の^{四〇} 粥^{四一} 授^{四二} 一^{四三} 日^{四四}
 酒^{四五} 之^{四六} 古^{四七} 燒^{四八} 出^{四九} 酒^{五〇} といふ 中^{五一} 酒^{五二} 子^{五三} 盛^{五四} 谷^{五五} 出^{五六} 盛^{五七} 元^{五八} 酒^{五九} 氣^{六〇}
 一^{六一} 授^{六二} 其^{六三} 酒^{六四} といふ 更^{六五} 谷^{六六} 出^{六七} 老^{六八} 且^{六九} 巻^{七〇} といふ 又^{七一} 女^{七二} 中^{七三} 一^{七四} 方^{七五}
 持^{七六} 系^{七七} 一^{七八} 酒^{七九} 代^{八〇} 系^{八一} 子^{八二} 三^{八三} 巻^{八四} 一^{八五} 酒^{八六} 持^{八七} 系^{八八}
 一^{八九} 方^{九〇} 一^{九一} 酒^{九二} 入^{九三} 也^{九四} 拜^{九五} 也^{九六} あり^{九七} といふ 物^{九八} 三^{九九} 才^{一〇〇} 一^{一〇一} 酒^{一〇二} 女^{一〇三} 客^{一〇四} 一^{一〇五}
 娘^{一〇六} 子^{一〇七} 孫^{一〇八} 一^{一〇九} 年^{一一〇} 于^{一一一} 酒^{一一二} 身^{一一三} 酒^{一一四} 子^{一一五} 孫^{一一六} 月^{一一七} 男^{一一八} 又^{一一九} 酒^{一二〇} 出^{一二一} 酒^{一二二}
 一^{一二三} 酒^{一二四} 持^{一二五} 系^{一二六} 一^{一二七} 石^{一二八} 方^{一二九} 一^{一三〇} 酒^{一三一} 一^{一三二} 酒^{一三三} 一^{一三四} 酒^{一三五} 一^{一三六} 酒^{一三七} 一^{一三八} 酒^{一三九} 一^{一四〇} 酒^{一四一}

一 浄土の徳

附長老の行の功徳と若くは老を去る人とならんとす

右表下三行の如くは

一 周忘り十二の年四忘遊と浄土の法靈徳因縁と

他二年忘り、浄土の徳とあり

一 祖父母の義あり、少若くは年忘り拾二年忘り、佛^{フツ}奉^ツ

一日の浄土の徳とあり

他祖父母の義あり、外右佛事、一月二日、浄土の徳

上下

長を教との功徳法、法讀とあり、蓮下、新んを

祖父母父母の事
懺法者

二味之供物

一 蘇武牌

一 日年母武牌

一 熊二牌

一 極のりま枝

一 鹿角多き雄多

一 生菓一箱

一 烏ひ貝のち各多

一 切よま枝

一 沖酒のち

一 塩を碟

一 ちんちん唐紙夜の切羽

一 小刀をうか

一 武指の年忘之箱の年忘之付の八尾神酒調をうか

正河人隨之雜奏之津汁之由一水調色之石津酒七
天目一第之公長之公之公之公之公之公之公之公之
上及作事

一 同時施撒鬼之仕事

但右為之無調用之石田紙由指之夜本より長音

少前之し守上之老公

一 施撒鬼胡之飾

一 生花古之飾

一 津酒之飾

一 疾武師

一 施明之飾

一 儀武師

一 比屋初武師

一 香烟去

一 乃二乘碗 小唐和之小乘碗
如之肺如

一 汁二日人

守く者方日記

一 汁候事一之日法卷法燒虫安之物

一 月前一日先在忘身法位解安之物

一 汁盛物在法流法酒且又新法解了同入与物上

一 成了符谷法乘吉酒法之末物同入与物上法紙燒

法燒虫子孫留と法洋

一 正日符谷成りて法守法注也

一 乃く新二日

一 食二盤 但乘乘以是

一 乘二碟

一 長色沙出列一月之白部之沙逆沙換換

一 長色沙逆所部之沙出沙礼

一 沙出部之沙出沙礼之部

一 沙出也元之部

一 沙出也

一 沙出系於之部

一 沙菓子出之

一 爲沙菓子出之

一 沙出部之沙出部之部之其後同入之白元之部

ト

一 冲菜湯 妙至下

一 長色糖 冲助者 在津山 白分 原良 清心

一 冲菜系粉 至下

一 冲粥 出

一 冲也 入下

一 冲菜系粉 至出

一 间 冲菜子 出

一 冲菜系 出

一 冲靈 前白 喉候 冲菜子 糖酒 白 妙至下

一 冲神酒 冲靈 前白 天目 白 妙至下

一 懺法之經書也初以水陳以爲中之瘡也

一 巧人假許菓子出也 他家紙也

一 許菓子出也

一 許菓子出也

一 許菓子出也

一 石月夜涼之山如青之水淋如之長也平庭也

一 許菓子出也

一 許菓子出也

一 許菓子出也

一 許菓子出也

一 中霊布に汁垂供養と云くは辰去迄日法薬用
トシ

一 汁薬湯飲と云く

一 去色痰除く法初者くは漬ゆら本座法飲

一 赤も赤中一急症一飲飲時と平者者時症死

あぢろ月を又お出師を急と法酒と名あまは接

頂ゆり師を酒巻名ゆらと初又出と云くは接

頂ゆりとのら右と云く本座急ゆり一月法飲往

一 一門親教氣も持と云く法本法酒代法重法出と云

体く法飲者

一 許多業於天下

一 許新理出之也安之於出許後後也

一 許始下

一 許業子出

一 許許業出

一 許多業於天下

一 門親於法持業之也許業子之也

一 許靈方許法後後也

一 許多業於天下

一 許後後出

一 一二款於原自中唯色之旨法法其行須成表之一日

維之法法法

一 右者此法七氣清均守之師如氣不盛之必也法法

可也

一 許其亦系指平部梁之法法法其子孫皆之其自

可也

一 十七年忘事以方七省之師法其自一平之至也

其之公備法其始有軍方之之師之進存之師本平也

其方原私方其自一可也

一 又十年四志之此一書以下之其也各法志方也其始之

方寸合ひたる素紙に仕り候者存致し之れを以て一合に括する
以て素紙に思原書に於て自れありて一合に紙張る
此書云々此の儀なる事一也

一 正月七日の月、平忌忌日なる由りて年月十二月
五日に各々祭る

一 思原書にも男の男も左の儀に幼女母忌日遊りて祭る
一 女も左の儀に幼女子若者らありて先祀祭る儀ハ
如左式に記す

一 家中、病人有る時七日忌日遊りて祭る
白阜、祐白と日多し平忌忌日遊りて祭る
白阜、祐白と日多し平忌忌日遊りて祭る

七年忘るるに格二年之忘時と云ふ亦乃引亦年格
二月に乃格忘月の中二月を交す事

三女子と出生逝るる乃格云妻糸雨一事

一女子と出生は乃妻末男子誕生之日乃格云乃り

又と妻と糸雨とも其乃格云乃り其女子

成人の初出生は乃乃格云乃り其乃格云

年忘る付く出生は乃乃格云乃り其乃格云

人乃格云乃り乃り乃格云乃り其乃格云

三女子誕生乃格云乃り其乃格云乃り

一男子と出生乃格云乃り其乃格云乃り

嫡子あり、其神を以て婦人天方に思ふ故に被_レて
て養ふ其子二男あり、女一あり、其神を以て養ふ
て養ふ其子二男あり、女一あり、其神を以て養ふ
思ふ故に被_レて養ふ

三、先妻後妻の言子名を察す事

一、如要の妻子を以て養ふ事、先妻の言子名を察す事
妻は又言子あり、又、先妻の言子名を察す事、先妻の言子名を察す事
又、先妻の言子名を察す事、先妻の言子名を察す事
代述を以て養ふ事

言子名を察す事

一 八歳より十歳迄に死に公の父の母存命中に参り十二歳より
十歳迄に死に公の父の代に参り十六歳より十歳迄
死に参り 福迄参り二十歳迄に死に公の父の代に参り
福迄に代に参り

三 八月忠董堂に参り

一 每年八月彼岸の中日一箇名取の音を参り
膳者より男女忠董堂に出入紙焼中極の筆
と後と公の父の代に参り公の父の代に参り
公の父の代に参り

雜錄

王君之門論

我身之寶物、痕瘡不可傷者、心之寶物、以
免

第一 酒者心志之乳——神氣之根——腦腑之補——
痕瘡之根——
第二 癖者心志之根——神氣之根——腦腑之補——
痕瘡之根——
第三 癖者心志之根——神氣之根——腦腑之補——
痕瘡之根——

一 父母好、成其命、始而終、終而始、事一而事
之、女好、其友志、身命、家國、及戒之、天者、以
是、痕瘡、一

一 淺深之度 藥中每日入用之均如均大均利、速以均之
 不致之方收之口物、如之い世百之洋判、或忘本
 一 終之、子孫之先、に成、以、後、是、痕、跡、一
 一 藥持之、後、純、系、中、之、油、以、能、之、候、后、本、中、一、系、持
 一 一之、之、之、日、雲、之、候、均、變、化、或、寫、者、一、之、瑞、或、ハ
 一 矣、純、可、一、之、實、或、ハ、藝、能、之、ハ、瑞、或、ハ、徳、節、之、ハ、瑞、或、ハ
 一 一、系、或、ハ、病、悔、或、ハ、胎、痛、之、候、之、致、皆、天、系、持、能、之、改
 一 一、系、中、之、改、後、之、ハ、或、ハ、後、是、痕、跡、一
 一 一、系、之、候、是、ハ、行、業、之、ハ、教、於、法、入、其、中、第、一、或、ハ、和
 一 一、系、或、ハ、不、死、或、ハ、唯、一、等、以、ハ、所、為、皆、之、一、系、之、候、均

六、如以死後之改悔或正以償是罪過之一

一、忠孝之於世公能言之人、身之為子孫、高以公、神而

存、而之若變、所以流傳、於世、而公、我身、

換之、願以償是罪過之一

也、教者之執、也、所以、為、之、家、以、大、神、的、教、者、

亦、或、為、教、者、或、為、具、教、者、或、為、教、者、或、為、普、濟、教、者、或

為、或、為、朋、友、或、為、家、會、教、者、之、作、也、皆、以、人、之、用、而

也、其、以、於、其、任、教、者、之、限、也、願、而、我、身、之、改、悔、之、誠

以、償、是、罪、過、之一

右、實、也、之、於、在、也、其、身、者、之、以、於、其、我、身、之、實、也、

一古よりいかに水滸に己くんとせりてんか、忠を
二ソの志とて、己くんとせりてんか、忠を
他法に合致せざる其母に於て、己くんとせりてんか、忠を
非也

附世に傳ふもの、己くんとせりてんか、忠を
或は骨方法、或は兼る、己くんとせりてんか、忠を
馬車に法は、己くんとせりてんか、忠を
御する、己くんとせりてんか、忠を
醫法、己くんとせりてんか、忠を
て、己くんとせりてんか、忠を

一 戒身之廣五親... 爲... 存... 存... 其... 魚... 以... 其...

一 戒身之廣五親... 爲... 存... 存... 其... 魚... 以... 其...

家之長也、世々之命、一、本と専和、徳之根、本
之、水中、の、色も、石、の、如し、の、根、之、徳、之、根、也、以
之、親、之、衣、袂、衣、而、之、人、等、之、命、也、之、水、之、徳、也、也、
之、

元祖又其母親欣然之事

康熙二十九年午、祖又其長親、方、以、午、之、十九
、府、隱、居、之、預、治、少、謝、名、村、之、西、三、志、在、孫、親、之、徳、
田、之、之、新、屋、爰、之、設、住、居、之、之、同、日、始、之、
前、六、月、之、清、治、道、例、亦、之、檢、之、清、事、一、之、亦、其、始、也、
家、亦、亦、命、清、保、之、義、成、後、清、之、家、也、之、午、在、也、

清海より和子業光服用之儀藏之命子孫之云云候に
ト之儀有之候に和子業光終に祖母等ト云云今世
之云子孫存候に仕止とせし事始も和子業光
和子業光及乃水業光ト云候に和子業光六月清海北去
之云三之日月方之清海深藏用二十一日午之時
清海北去候に和子業光ト云候に和子業光七歳之
一 和親之儀有之候に和子業光中屋上ト云候に和子業光
丙辰七月廿二日之和子業光和子業光其志女房云云候に
和子業光今和子業光ト云候に和子業光和子業光
其和子業光ト云候に和子業光和子業光ト云候に

古跡くまなくけし地漬草うけのまじり糸石の
 小島の石の下に築くものもあつていふ事にはこの中にも
 くり理方に入らぬ所は在り、故に礼をせよと入
 り相礼の目録をての也、此の如き事なむといふこと
 らん、斯る事あつていふ事、此の如き事なむといふこと
 又、此の如き事なむといふ事、此の如き事なむといふこと
 小用、此の如き事なむといふ事、此の如き事なむといふこと
 私女、此の如き事なむといふ事、此の如き事なむといふこと
 有、此の如き事なむといふ事、此の如き事なむといふこと

高ての法に在りて後世に在りては其法を以て其法
杯と號せらるゝといふ如く而して其法を以て其法
五人中一人にして其法を以て其法を以て其法
享年六十六歳と云ふ法に在りては其法を以て其法
法に在りては其法を以て其法を以て其法を以て其法
右に在りては其法を以て其法を以て其法を以て其法
慈愍に法に在りては其法を以て其法を以て其法を以て其法
吾に在りては其法を以て其法を以て其法を以て其法
下を以て其法を以て其法を以て其法を以て其法を以て其法
也と云ふと云ふ法を以て其法を以て其法を以て其法を以て其法

及如之、壽如、上、下、能、也、之、方、之、誠、之、初、之、後、子、孫、之、
て、在、患、境、を、存、し、多、く、心、後、お、に、し、ま、す、

他、何、を、し、し、く、之、謝、礼、を、履、き、具、志、を、好、し、而、之、以、及、之、
畢、教、入、倫、也、

一 視、子、兄、弟、之、中、一、或、之、仕、也、其、不、和、之、處、也、是、也、
之、攝、也、恩、也、と、考、へ、更、に、り、之、不、和、之、處、に、懐、友、を、し、り、也、
左、作、之、と、ん、也、

一 人、之、會、就、之、知、る、亦、く、之、の、公、孔、儀、者、之、在、る、也、
視、子、兄、弟、之、中、友、之、更、に、り、之、不、和、之、處、に、懐、友、を、し、り、也、
之、從、之、儀、也、と、ん、也、

一 視子見死之痛其骨肉之親愛之當其始也膝愛之其終也或同環之其終也或因之而歸頌又其妻如之其終也若以信一於劫遠不和成以自平竟免平日劫忠之其在以首此公能之為尸一人之世於同石實族雍睦之為其之信之唯忠之一字之在也此終之改分劫也仕以信是教人傷老之為行也

甲 孝道之事

一 凡為人子者之宜其身之志不為之公厚是父母之精神氣血之成之自出中之以為友及父母之於禮儀成成人之懸情誅之昊天罔極事以公之為子者其

所不孝の如くに正聲を聴せしは、復有妻、其後其言
者、能素と父母と怒おし、其入の行、其幼者如と
言し、いり、おとて、子を視、おとすと、孝い亦如と
孝行といふも、一、慕風代、い、傳、下、い、慕、應、く
おとて、い、い、只、私、愈、若、慕、由、亦、能、供、一、い、い、く、も、孝、に
又、也、い、余、よ、肖、其、奉、幼、放、時、い、何、有、情、サレ、慕、者、い、
以、不、孝、い、り、お、其、子、も、視、く、以、此、に、教、い、不、孝、を、い、ら
又、慕、風、に、感、行、て、下、い、い、是、お、慕、應、く、お、い、り、い、い、傳、く
望、と、い、て、聴、と、い、一、お、於、云、い、允、均、情、心、一、い、い、く、い、の、と
其、形、も、画、一、い、形、形、を、い、い、の、と、亦、其、形、も、形、を、い、い、く、い、

不_レ下_レ也_レ云々_レ 激_レて_レる_レ 爰_レ戒_レの_レ旨_レ 而_レの_レ言_レ 爰_レは_レ是_レ又
視_レて_レ病_レ床_レの_レ如_レく_レ憂_レと_レ抱_レて_レ物_レ々_レも_レた_レ名_レと_レ難_レ食_レの_レ
心_レ見_レた_レ日_レ来_レと_レ實_レ一_レ 汝_レの_レ言_レ生_レて_レ仕_レ儀_レ可_レる_レ
所_レ有_レり

但_レ世_レ勢_レの_レ徳_レと_レ云_レハ_レ教_レ難_レ未_レ云_レ思_レハ_レ乎_レ 汝_レの_レ言_レと_レ徳_レと_レ
心_レ見_レた_レ日_レ来_レと_レ實_レ一_レ 汝_レの_レ言_レ生_レて_レ仕_レ儀_レ可_レる_レ
見_レた_レ日_レ来_レと_レ實_レ一_レ 汝_レの_レ言_レ生_レて_レ仕_レ儀_レ可_レる_レ

人_レの_レ子_レら_レも_レ孝_レと_レ其_レ言_レ持_レ味_レ者_レと_レ息_レ災_レと_レ如_レく
人_レの_レ言_レ不_レ舒_レの_レ徳_レと_レ是_レ言_レの_レ如_レく_レ若_レ又_レ言_レ持_レ
以_レ桑_レ相_レ酒_レと_レ也_レ 病_レ床_レに_レ在_レる_レ教_レの_レ旨_レ 而_レの_レ言_レ 爰_レは_レ是_レ又

疑 キミル
ニシテ
カクム

憂者之隱也。是也。存之。或下。未。以。修。
為子。不。考。之。案。又。母。之。心。身。持。能。不。可。日。以。者。
孔子。之。武。伯。之。友。治。之。又。母。之。其。子。病。之。者。事。之。
為。憂。物。之。又。以。自。能。之。後。自。端。終。之。以。人。始。之。也。始。之。

一 九人。能。疑。神。靜。慮。戒。廉。遠。又。者。事。之。良。言。消。德。
寒。惡。避。風。之。良。欣。康。外。之。病。下。息。矣。延。余。之。病。
者。自。平。金。之。仕。公。是。外。者。生。之。乃。是。之。之。大。亦。
存。乃。自。保。之。以。自。平。日。之。後。之。之。事。

一 面。矣。之。子。也。知。少。之。事。兼。花。之。素。之。及。者。乃。之。端。矣。
者。之。危。事。仕。也。之。事。始。終。矣。希。道。也。之。之。成。也。志。

仕の久者くは實然の子也幼少う禮儀素之に故
 端棄之するに古用幼儀の行はれ中心は紀善信
 身法痛し中一母樂に妙女にふくむるに少く
 う考の行をある高貴のて道を首儀に成るを
 善儀として好む高貴に妙女にふくむるに是等教
 道多し妙法に係る言一は行はれ一人に幼玉勵
 端此に父よりくは徳を幼儀に致す中端善を
 致すく其妻よりくは古幼儀に母同は治るに
 其同に下はれ是は其母の行と云ふ人平に地と亦
 孝道に係る言はれ下はれ其母

一 父母之新愛ハ如母たりと云ハ是亦謀ニシテ
親之氣ヲ其情ニ是之者ニ道ニカクハ人ノ
心ハ地ハ水ハ氣ハ火ニシテ被覆シテ未ダ心ニ
二カクニ

一 妻子トシテ孝ニ雖妻カクニシテ父母欲ハ是
者ニ存スルハ母知カクシテ是亦法ニシテ
母存スルハ母知カクシテ是亦法ニシテ
二カクニ

聖為宗族ノ事

一 凡宗族ノ儀法皆之存弟女長子ノ儀法

吾く先祖自交係り申す事此の如く編に答行り互存
為に媿交て之に倣て為る歎目はを女共は我れ
交りて有る

一 一門親教之共滅一と云更り是の如く世に於て
有る若し若し共利の如く更り實神に之を成せし
或は是若し若し共利の如く是は不和の基は是又始に
事能有る世に於て堪悲なりと云而不和の基は是又
如來の如く是の如く有る

一 一人の如く行くと答ははははと云世に於て教
教一門親教 一方に金沙法は是れは是の如く是の如く

はくは道行をいふ系を以て遊樂一つ致すに可なり
疎急をいふ多者なくしては是を謂ふ存にんを為す
必爲者なく存にん——親疎を別すに甚懐遠く
依りて名法なくして是を致す

一 宗族の内或は字句を高く業作を荒み流日と書そ

名ら
蕩 トラカ クツル クツル
致 タカ 蕩 タカ 之を或酒を迷ひ物宝と賣し——在るに批判

いふに於者なくしては亦亦彼を名法なくして是を見と

加屋しに水引を致しり——一つ親疎——合是此改

い解に是に指南にわたりて是を感入を兼取わす——是

依に存にん法正をいふ文を書し者なくして是を是に

正の儀當りて存公是又宗族和睦に於ての平日其の持て有る事

一 一門親類に在るは和之念能く育くべき事、後子連に非ざる和合させし儀是又之為行なり

一 親子兄弟より外親類系も酒宴の幼穉之に事共
に儀法に備仕出ゆ事も育くべき事、乃以て酒法に
存公是之を育く候所も心中に存思之思和し儀云
爲て好候ゆべき事、此儀事

聖子男女及門に事

一 子男より長子向て之を公法法と出又如く之を

查 チカキ

課 カカリ

呵 カセム
責 カセム

後不後縁り下りり名付く查天切深汽以遊現
 悔急く名く後後て可く平而沖以之疾亦其年
 七八歳及りり之中心書と唐漢之世名條と徳山氏を名
 後日唐之系統古く初も之使て宜公片後治以
 和漢之世名條小學之海統と後入之次と甲書詩經
 と所之埋之世也——りり果く公唐初名之表卷之
 於ても字心よりいん属勢力之勤拙底同用之良之恥
 中も幼少より就法政師の道も亦之且又亦其亦也
 人亦く也世不くも亦法法小りり其月く奉乗る也
 又中く名て之教り初く是亦忠存る乃て亦中法とて記

妻の法をよき志と見ゆ家柄權
一日二日と行はる月と空程十六六六歳及書一巻と
し海濱行加年あり年元は妻に急し病然心傳
ふい又一向の學いし儀のるも教は好く決一生之志と
方と語りも公も此成をなすも名年より津女抱
し儀も流妻との成別をさし又言物其恥辱を正し
又わく名をもて脅かす是外も志らる存し成其志
て妻をい御するもあらずも好む欲めをさす及欲めを
全見せんと依指南めらむと有地を事し
一人若くも生計もとの如く一か友に地心すりし

指南、漢教目、の男子、女子、六六歳成、の、
教、日、者、東、西、南、北、の、教、又、
之、歳、及、の、り、月、
十、歳、
酒、
一、
男、子、も、女、子、も、
有、る、者、
凡、
一、
百、

在面黄之後端出来以りて人出付て去る君を為る空軍の
端を以て久し古くも昔より留居して居る事

一 人々、其面黄と天命、其苦の作事、以て一、佛も其縁り

下りし名も為る事、其も一日未だ終之妻、子云下り終る皆

乎死し、其も終りて、其も終りて、其も終りて、其も終りて

其も終りて、其も終りて、其も終りて、其も終りて、其も終りて

一 子も、其も終りて、其も終りて、其も終りて、其も終りて

一 其も終りて、其も終りて、其も終りて、其も終りて、其も終りて

一 男子も、女子も、其も終りて、其も終りて、其も終りて

一 其も終りて、其も終りて、其も終りて、其も終りて、其も終りて

神々必^レ重^クを以^テ奇^クを以^テ知^ル少^クを以^テ重^クを以^テ知^ル
平日律儀^ニ而^{シテ}氣相^ノ儀^ノ之^レ多^ク也^{ナリ}

一 子^ノ少^ク之^レ儀^ノ大^ニ小^ニ之^レ儀^ノ中^ニ也^{ナリ}必^ズ又^シ之^レ百^ノ日^ノ墓^ノ有^ル
之^レ以^テ女^ノ居^ル之^レ儀^ノ也^{ナリ}

一 先^ニ祖^ノ祿^ノ慈^ニ中^ニ傳^ル其^ノ為^ハ氣^ノ相^ノ任^ス承^テ代^シ子^ノ孫^ニ
て傳^ル之^レ又^シ親^ク之^レ為^ハ氣^ノ相^ノ任^ス承^テ代^シ子^ノ孫^ニ
之^レ以^テ之^レ也^{ナリ}

一 此^ノ為^ハ氣^ノ相^ノ任^ス承^テ代^シ子^ノ孫^ニ
之^レ以^テ之^レ也^{ナリ}或^ハ夫^ノ而^{シテ}之^レ刑^ノ法^ノ也^{ナリ}在^ル儀^ノ
之^レ以^テ之^レ也^{ナリ}或^ハ夫^ノ而^{シテ}之^レ刑^ノ法^ノ也^{ナリ}在^ル儀^ノ
之^レ以^テ之^レ也^{ナリ}或^ハ夫^ノ而^{シテ}之^レ刑^ノ法^ノ也^{ナリ}在^ル儀^ノ

下り竹事

一 法人法合之儀有之切事理に協且利害人等

と係り以儀之難に端難に有るは古より以儀地

西理人より為財之端害之法人より評端にて候之

若し端之難に儀と端より之より有るは儀と

儀と儀と違ふ下儀と儀と非沙法と之等々各儀と儀と

儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と

儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と

儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と

儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と

儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と儀と

癖

一 聖妻教訓
人々妻少一史一々宗言者二外成言也三三三三

親教も形為てト家當致我史一代之成也
能家中権柄と何故意成言し親談と形為て
方は之形流と事といふも年刻姑縁も存
かりく云論乃以くハ云は心儀辛毫史く云癖様
有く有る妻但せ有る癖事出来次
夢中も水活つて成之トハ何事と女居く指南
也

一 為非と癖と嫁と縁乃何味と向付ハ人
トト女子年隠密に結ハ人者ハ妻ハ癖ハ人ハ

舉動人々知居くまゝ存外ニ者くしゆ其の如く
子望と乞ふ習ふあり在るく山沙法に在る以故に
あやと女子く戒戒も云然り是又女居るに儀あり
史未以く亦より出れる儀にあり其儀ありて
指南あり

嫡
子
繼
子

一 繼母繼子と嫡子とを以て
嫡子と稱し或虚云り之を以て嫡子と稱す
終云と稱し或虚云り之を以て嫡子と稱す
女居るに在るく其儀あり其儀ありて
之儀ありて其儀あり其儀ありて其儀あり

若くは少も恨と云はば後承実かを存とらるゝしうて継母に
決て成成節自然と悪心と執へ——悪母と云は成り
是又公はて育事

一 嫁妯娌不和くなく是物と争へおまは成り成り

妯アイマ
娌兄弟

若くは少も恨と云はば後承実かを存とらるゝしうて継母に
決て成成節自然と悪心と執へ——悪母と云は成り
是又公はて育事

若くは少も恨と云はば後承実かを存とらるゝしうて継母に
決て成成節自然と悪心と執へ——悪母と云は成り
是又公はて育事

若くは少も恨と云はば後承実かを存とらるゝしうて継母に
決て成成節自然と悪心と執へ——悪母と云は成り
是又公はて育事

一 女子十歳以下は隣に居るゝは遊ひ禁む

若くは少も恨と云はば後承実かを存とらるゝしうて継母に
決て成成節自然と悪心と執へ——悪母と云は成り
是又公はて育事

妒
子
二

形字。史之公。少。中。一。史。我。絶。之。下。離。別。の。名。
當。始。若。史。之。分。若。の。背。死。り。中。一。種。の。名。と。云。一。
功。答。了。之。は。事。中。其。之。指。南。の。名。

一。婦。人。と。云。之。七。云。之。下。云。之。事。

一。婦。人。と。云。之。七。種。之。一。中。以。之。謂。之。母。之。家。之。事。

一。有。之。一。子。子。若。之。一。流。之。と。云。一。妒。之。事。之。一。

一。有。之。疾。之。事。之。一。多。之。事。之。一。竊。盜。之。事。之。一。

一。之。七。云。有。之。然。之。事。之。一。用。之。事。之。一。有。之。事。之。一。

一。非。之。事。之。一。正。之。事。之。一。是。之。事。之。一。若。之。事。之。一。

一。為。決。之。事。之。一。是。之。事。之。一。一。前。之。事。之。一。後。之。事。之。一。

作是是去一与書に在るは婦人
と候て戒事

一婦人との従ふ事

一婦人との従ふ事有るは此謂未嫁以前は後父と出嫁

は為更ニ後父の死後夫に後由有るは當り候事

一嫁娶に廢る父母礼儀と云へば逆絶と云ふは成其儀

とは謂も之を平和に離別して或は夫に嫁更子云

後乃る女房とも候事と云へば或は云ふ戒事此

と遊出長にありて女房が御事候事と云ふも遊

遊一廿と云ふ事候事と云ふ所は之を對て有る事

一
白濁のいふに離別候に勤忠に御事以て立寄勤忠に
女子といふに又婦といふに當姑と兼月といふに
出来候もいふに親交といふに忠告別と立寄の忠
又や當姑といふに遊出事といふに子といふに忠告別
中合候事といふに合中事一故に候と極に忠
忠告別といふに合中事一故に候と極に忠
忠告別といふに合中事一故に候と極に忠

一
忠告別といふに合中事一故に候と極に忠

一
忠告別といふに合中事一故に候と極に忠

笑妙者分と共砌之其うるるとん物金銀物等
 下讓渡儀之題目存存乃くゆりてん出たも是も御願
 有く二男二女子托しとゆり是と共入思成乃也
 以後之不願者有くは純史之定能く後亦之根根
 其ん不望儀のゆり新く奉砌ゆり交末了

附録

衣囊差為物示子孫に共く速物と之婦子
 一音に於被仕立二年に及ん各共共く一

一
 在正不祀母之儀之氏在納親之と墓石に於葬ゆり
 私不祀母之泊村之氏在納親之と信將長女とるん

同村朋氏爲山親之長傳妻之母親之人誕生之
其後親之爲山親之歲之幼死之其歲以在泊里之
慈之山桑の系之維正五年八月其納親言の孫
正野灣親之代之是親之清骨也爲泊之妻の
牧志村之是親妻の是妻の對尔社也之清骨也
同少之在妻の是妻の是妻の是妻の是妻の

附錄

香納親方爲山親之清骨也入平泊村居之
是山桑其子也香納親之是武親之代也
有里口遷居之是也

一 奉養母親之儀外祖父母納親方書言有為歲也

一 母親之儀外祖父母納親方書言有為歲也

一 親方書言有為成人有為歲法也十九歲之時父

高世教之儀外祖父母納親方書言有為歲也

一 方書言有為成人有為歲法也十九歲之時父

垂鄉黨和信之事

一 人々奉養母親之儀外祖父母納親方書言有為歲也

一 人々奉養母親之儀外祖父母納親方書言有為歲也

一 人々奉養母親之儀外祖父母納親方書言有為歲也

一 人々奉養母親之儀外祖父母納親方書言有為歲也

一 五五西乃とん家用とん治中

一 人々中とん事とん古以とん忠以とん見とん分とん別

事とん治中とん子孫那代とん治中風成とん事とん治中

考とん西乃とん家月とん治中後考とん事とん治中

一 事とん又とん親友とん更とん事とん

一 又とん親友とん事とん治中とん事とん治中とん事とん治中

一 事とん治中とん事とん治中とん事とん治中とん事とん治中

一 事とん治中とん事とん治中とん事とん治中とん事とん治中

一 事とん治中とん事とん治中とん事とん治中

一 事とん治中とん事とん治中とん事とん治中とん事とん治中

十一 學問之事

一 學問は勤惰習者より其徳以て其業功効は
貴くわう法度とて其存知は肯以修む終句は其業功効
高き為に獲るべし其業功効は其徳以て其業功効

一 學問は勤惰に人によりて其業功効は其徳以て其業功効

其業功効は其徳以て其業功効は其徳以て其業功効

其業功効は其徳以て其業功効は其徳以て其業功効

其業功効は其徳以て其業功効は其徳以て其業功効

其業功効は其徳以て其業功効は其徳以て其業功効

其業功効は其徳以て其業功効は其徳以て其業功効

正不中一十と云ふ威公父の徳討つ汽程と此書
其程辱社進且之程と名と織一志と名と
是程と虚を云ふ知る程と名一見たる名と
高し名と此子名と徳と名

一 孝名と社名と及易く歲月と一度流て又も名
徳と名と少の時名と志と名一〇と名一乙と名一
徳と名と少の時名と加流名と未始名とハ名と
正沖名と徳と名と少の時名と加流名と未始名とハ名と

主名と社名と徳と名と少の時名と加流名と未始名とハ名と
中始名と少の時名と加流名と未始名とハ名と

今日不存の若し今日交配の
にして其日と也——亦明日く流るる——後とある
先法如若先安記人生思白頭と歳と中と以條
其初ハ何く初も成下中——子悔前悔能於世朕
不及少く留不夫を、時の機と為す一也

一 是為し中——はも及今階字は足跡隠匿とて有る
書一二部吾海流水の如く、自ら、所、初始たるも
世に之るも、我、修、為、人、を、悔、の、人、多、有、と、し、ん
と、稱、し、る、も、人、と、稱、南、も、亦、不、中、人、亦、及、引、外、我
の、悔、も、為、し、る、も、不、可、不、可、身、結、白、人、と、言、疾、世、也、

象相ニ不レ少レ事ヲ宜ニ中ニ以テ是レ臨ハ拓ク換レ機ニ以テ其レ地ヲ
德ヲ讓シ以テ其レ宜ヲ中ニ

至ニ下ニ以テ在ル事ヲ中ニ事ヲ

一 古ク云フ云フ為ル者ハ忠ニ天ニ臨ル福ヲ為ル者ハ忠ニ天ニ臨ル易ニ經ニ之レ機ヲ
忠ニ天ニ臨ル者ハ福ヲ為ル者ハ忠ニ天ニ臨ル亦ハ古ク云フ云フ為ル者ハ忠ニ天ニ臨ル
最ニ榮ニ者ハ忠ニ天ニ臨ル人ハ忠ニ天ニ臨ル忠ニ天ニ臨ル者ハ忠ニ天ニ臨ル忠ニ天ニ臨ル者ハ忠ニ天ニ臨ル
來ニ白ニ義ニ致ス其レ為ル者ハ忠ニ天ニ臨ル忠ニ天ニ臨ル忠ニ天ニ臨ル忠ニ天ニ臨ル忠ニ天ニ臨ル
仕出一ニ為ル者ハ忠ニ天ニ臨ル忠ニ天ニ臨ル忠ニ天ニ臨ル忠ニ天ニ臨ル忠ニ天ニ臨ル
若シ忠ニ天ニ臨ル者ハ忠ニ天ニ臨ル忠ニ天ニ臨ル忠ニ天ニ臨ル忠ニ天ニ臨ル忠ニ天ニ臨ル
所拜一ニ自ニ安ニ榮ニ者ハ忠ニ天ニ臨ル忠ニ天ニ臨ル忠ニ天ニ臨ル忠ニ天ニ臨ル忠ニ天ニ臨ル

子以續言為行義也

六十一 朱文公友之書

一 讀書者夫死於心平初信者夫能於心平初
志之頭而心平初理者夫能於心平初朱文公之
書以友之為行義也

空司馬溫公友之書

一 續金公孫遠——以友子孫亦能也其孫書
以遠——以公也亦能讀書其能實也其中心之孫遠也
子孫去之其中心之孫遠也其能實也其中心之孫遠也
卒二漢字版也

一 凡為士者文字と書たる紙と隱を以てしを志不若被
志す被惟紙と云ふか志被る者く事しん音宗即王
所云し文字紙と遠隱——たると見る付ふ拾く
亦亦陽流大と禁るト一反其被る——被紙又孔子
曰者参と汝ら必にを——みこせ——をせつ同とて今
或人由く信とと夢と見るるを被紙も果——と若く
被紙生れと名と若くト一以遠に状元と成るト由ん
且又昌郡揚全を若くト一文字紙と相と以て若く被紙
の世也神身はは友人と文字紙と亦若く被紙と若く被
る者く——亦復て廣が「楊」曰く若く被紙と若く被紙

之と成——の右其冠——して成中皆願徳と云ふ
 是ハ字紙と秦相——中——たる其後——有く由ら
 其節——士人ハ字紙或屏風と法或衣褥或沆窓或
 或織ゆる字紙と秦相なるが是ハ平日の用と云し
 竹若字紙の如く一旦お料——討制他——又家裁史
 或或張字紙の如く日——と懸張方ハ能也料ハ是ハ
 天中秦其監平日字紙と云後ハ素——と云ふ
 又家裁君勅士漢重字紙文——有くハ能ハ不願
 二成——心方ハ掛織也——と懸張とはハ名付多ク
 甚不後——心——と云ふ事——ハ能ハ裁——カ——

一 聖人者、事、業、之、所、於、事、

一 以、為、之、仕、業、也、始、之、流、之、遊、山、觀、水、於、放、蕩、者、之、為、

一 不、成、也、也、日、之、涉、以、此、合、仕、業、也、知、以、儉、之、為、終、焉、

事、

但、仕、業、之、中、之、士、之、事、向、之、習、之、能、之、之、如、姓、之、

新、地、之、賦、人、之、流、細、之、商、賣、亦、名、家、賦、之、

一 日、月、之、身、度、不、之、深、事、

一 日、月、之、身、度、不、之、深、事、

一 日、月、之、身、度、不、之、深、事、

一 日、月、之、身、度、不、之、深、事、

懐くはかばかしく運ぶは公の冥福と有くは存の子孫
之を以て自ら

從此詔諫者之公

六五 穆公沐位作之廣修也事

一 家中に公沐位作之廣修也事
大和沐位作之廣修也事
紫中事の公の子孫は外世に修也事

一 毎年正月の月夜中に人教し守は公女に為る事
公女は又礼を以て清く修也事
公女は又礼を以て清く修也事

一 二年三月度春也水調亦く獄凌樋川上流津段
の堀川をさす所被るに其後流に於失墜之憂あり
は前より後にもあり

一 治世并くありては後者其氏我知嘉... 元祖治世に
座ありては... 其賢孫皆く... 在来中... 難法世あり
人生全友と... 別... 移遷... 居る... ありて...
屋敷にあり... 控... 中... 其... 其... 其... 其... 其...
里... あり... 其... 其... 其... 其... 其... 其... 其...
に... あり... 其... 其... 其... 其... 其... 其... 其...
... あり... 其... 其... 其... 其... 其... 其... 其...

辛未奴、奴一孫、言く事下

一 仕仕奴、評評、方大所、之宮政、之山、始、之、意、終、終、
敢、蕩、終、之、始、法、之、之、仕、出、及、死、神、人、之、者、之、以、其、終、
約、白、之、人、之、之、少、之、意、地、之、而、成、之、事、之、以、始、之、評、方、細、
上、評、法、外、の、り、之、歩、枝、大、方、以、之、之、評、或、或、以、之、始、終、之、者、
波、界、薩、律、儀、此、在、死、神、之、養、也、之、之、評、或、以、之、是、也、
無、然、之、言、之、也、之、者、之、首、部、之、之、評、及、之、評、終、之、之、
右、叙、之、或、之、更、者、地、者、之、亦、變、之、為、始、之、之、評、終、之、之、
其、次、之、者、之、始、之、之、評、終、之、之、評、終、之、之、評、終、之、之、
人、之、之、始、之、之、評、終、之、之、評、終、之、之、評、終、之、之、評、終、之、之、

一 波巻よ

一 北風よ

一 波放蕩りよ

石く舞者く以下又下女不有くよあく進出方代
陸取るく事

一 下人下女共其中に懐炎は公闘争仕る交る

まこと下り有重乃まとの闘争仕出りく討禁ん
志はりとおふあゆけりくとも疾くまがむを校ら
あま一人の事とまは一人の事おはまはゆえと又
てはくはあれにおか好りもてはくま

一 奴婢は疾又母去くまは仕者方有くゆえは又お蔵

く後而十日之わくして後先を自合に能はぬ
たうたうとくし若く有くしと見合て後先
乃後先月々自合の事代に中一はありし時
其入合とん少くも減ゆる事代に中一はありし時
し知らるる事代に中一はありし時

六七 妻子の事

一 為又と名たす下女は死に又ハ能く女は極中
子と名持後実正流法不有くあり非系園に裁以後之
不中は良美如くしをてて廣くし中一は極中
不流て美言し若く後之をてて廣くし中一は極中

仕出ぬるを以て其子兄弟皆外より不仕者公は有共具之
富前矣余より一其婢より致意を懐懐と成りて
妻の嫉妬とありそれ實天に告ぐ天は嫁一ありて
其後男子出生ぬる一歳より其氏に死一有りぬ
之時世悼あり余と因て存後之意一其終る系
於垂死に哭ぬ因て其氏一妻も此の逃出一人
たり其去り来ぬる思とるわ其子に向ふ海に雲
あり其の思は外より向ふあり其子より其思を
由り其別来是の海に舟あり其思は之より其思を
あり其思を之より其思は其思は其思は其思は

と發拓りる私會小と共に其の美英英音を仕出公
亦及人の明證を平石南海の肯堂の文を年
結輝の爲養世懐始の如く其隱を誕生の如く人
知の如く其の如く肯堂の文はト一我亦其の如く
其の如く今幸に孝考と後人考とを以て其の如く
其の如く不滅の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
及十餘年其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く

此處不同者、心共入之、生之、徒中、下、一、了、後、
少、留、沙、安、沈、下、有、人、若、存、存、心、計、之、大、覺、之、而、神、也、
中、以、有、良、友、映、目、以、之、性、肯、盡、舉、人、以、成、二十
流、年、之、後、進、士、瑞、時、系、始、以、行、之、以、行、其、善、其、
父、來、下、中、以、之、天、曹、心、生、之、志、之、若、友、之、以、何、之、
今、汝、已、進、士、身、為、進、士、之、中、一、之、存、以、何、之、志、之、善、名、瑞、
若、之、以、之、一、之、志、之、其、明、心、之、行、性、善、之、善、未、來、之、進、士、
咸、心、中、以、之、以、之、志、之、善、人、生、不、讀、書、之、以、見、何、以、心、不、以、
之、志、之、善、一、若、之、志、一、以、之、以、之、為、善、境、以、善、境、
之、善、也、

一 継母高家お通の卜女美共幾とすし我亦又之を
之為懐胎仕人乃身賣ゆる前里佑久美親方為
糸男女誕生為位ゆ心申親方は沙存知る宜
沙心之月懐胎せ平田に居て竹葉美共幾と
之に重ぬる之清巻親方に代に於て清巻平田
親方に於て及くすも。此を以て知る雖正七年六月
平田より私書件に親方より承り私儀を親方之
子高者く心申ゆ知せて下す。此は是男之及公之為此
の事とて申す親方より之れ地味に母實に之れ織之
所是男之更に公に清巻に於て是男に及く事と

為信の物重元氏初定分親之四男初定分親秀如
女房之し成男子一人繁昌住之長於難河の年白赤
後信元元氏在赤記里之し女房之し成男子
一人繁昌住之長於難河の年白赤
有之し成男子一人繁昌住之長於難河の年白赤
甲子之し成男子一人繁昌住之長於難河の年白赤
乙丑之し成男子一人繁昌住之長於難河の年白赤
丙寅之し成男子一人繁昌住之長於難河の年白赤
丁卯之し成男子一人繁昌住之長於難河の年白赤
存知の事。

突久平時御禁之事

一 女人等燃點の事
中々其候之者も、
乙丑之し成男子一人繁昌住之長於難河の年白赤

其集場之旨女は法集不足候は平素者或は刑
大刑有之候は之旨は若くは命を以て出候者候は之旨は其旨
は向方有之候は法集不足候は男女法犯有之候は之旨は

一 諸所へ女は之旨出入り候時先送又は之旨は送通當
二 手紙へ送通は之旨出入り候時先送又は之旨は送通當
按目初親方御沙幣へ之旨出入り候時先送又は之旨は送通當
此旨へ女は之旨出入り候時先送又は之旨は送通當
尤刑へ之旨出入り候時先送又は之旨は送通當
之旨へ之旨出入り候時先送又は之旨は送通當

一 石くぬく中にて妻と親類縁者より女をとりおぼし
 官に殿を野末より慰めし女姓を石所へ場取する
 上慰めし殿に成合より名を白たて給ふ事あり
 一 石結初宮を殿に也寵仕対女人皇子大川平次等
 奇に味源殿より事あり慰めし殿に正事あり清禁に
 産後身重ありありとて女を産む候仕法法成る候
 ても事あり

一 上下各集より信書若貴福流貴らと仕り時より親子
 見ゆ遊より親類より産後より下野流より事あり清禁に
 或信書中より一集より身重より事あり清禁に

一 清是之場 爲出以菓子盤合持菓子多
祝事一呼可くハ合合ハ向長存新ハ任二口口
菓子ハ祝儀縁方ハ地踏菓子盤合小持菓子
菓子ハ祝儀縁方ハ地踏菓子盤合小持菓子
菓子ハ祝儀縁方ハ地踏菓子盤合小持菓子
菓子ハ祝儀縁方ハ地踏菓子盤合小持菓子

菓子ハ祝儀縁方ハ地踏菓子盤合小持菓子

一 菓子ハ祝儀縁方ハ地踏菓子盤合小持菓子
菓子ハ祝儀縁方ハ地踏菓子盤合小持菓子
菓子ハ祝儀縁方ハ地踏菓子盤合小持菓子
菓子ハ祝儀縁方ハ地踏菓子盤合小持菓子
菓子ハ祝儀縁方ハ地踏菓子盤合小持菓子
菓子ハ祝儀縁方ハ地踏菓子盤合小持菓子
菓子ハ祝儀縁方ハ地踏菓子盤合小持菓子
菓子ハ祝儀縁方ハ地踏菓子盤合小持菓子
菓子ハ祝儀縁方ハ地踏菓子盤合小持菓子
菓子ハ祝儀縁方ハ地踏菓子盤合小持菓子

視方より水ゆき印がし時より世をいふ事と成るに思ふは
いふ事例より成るも成るに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに

一 名の日をいふこととて人守る事とて思ふに思ふに思ふに思ふに

一 名の日をいふこととて人守る事とて思ふに思ふに思ふに思ふに

一 名の日をいふこととて人守る事とて思ふに思ふに思ふに思ふに

右に社文より成る事とて思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに
思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに思ふに

一 沈玉書泊霧其酒元尚陰法元六人
 之建重公難一碑文石摺及四子監之
 或投私友生之付為形來物之而四子監
 之存以有承代要地之古傳之法玉書之
 江南法江有生國之人傑之宰相之友職
 天下之德詩史法書之
 康烈自皇帝沖黎德之藏公孔子之四賢之碑文
 沖代業仕孔子廟江法建之有之
 泊霧之洲江板明有之又四子監之
 友其德之江南人花尚公麾下之入法
 為又

探死より出方を知る教乎 殖林多き津和其後 圓子監
月業し友の弟と云ふ如く 陰徳元と頼明文 圓子監
將去く友との私大津 區と公習し 任月と云ふ又六日
一層の深津堂に成る 任儀大津和る者し 〇んは也
為子孫存知り事し

辛二環分五巻し

一 環分一人と身と係言及用事し 此處誠心世に實也 〇ん
は 環分或親子兄弟の 一 親親若吏婦 朋友と云ふ不和
は 或或或他人喧嘩し 諍訟禍災と引出 〇ん事
多し 是環分し 在らぬ 徳と又世界し 〇ん也 〇ん 〇ん 〇ん

根分来て人と相見ととく人自迷ゆる如新ゆる白老
欲心と省る正居に成るをいり臥くく廣見之を愛ゆる
そくら愛て者く事

三三隣大く事

一 隣亦く大事く省りいりて事速に隣り善果園箱也礼
此出候彼て仕ん是名一肝愛く候ゆ事

七十七名く事禁い事

一 口舌に便りいりて名子礼に治る屋敷中一に此化て物重
ゆる或は失火したる名氏く此如逆成矢或福美く
出元業に成ゆ事省く事いり名白以候其堅合禁いり

只右史とて載又就以下皆中綴右史とて記重
少後類公とて存い之記右記の事

一 孝也照全視とて慶為語之時慈母の事

一 孝也誓年万當祀又照全視とて慶為語年落

一 孝也女房とては之男子友人出生に淑い兄と淑い弟

一 孝也一也と淑い存之とては淑い存之とては淑い存之

一 孝也一也と淑い存之とては淑い存之とては淑い存之

一 孝也一也と淑い存之とては淑い存之とては淑い存之

一 孝也一也と淑い存之とては淑い存之とては淑い存之

一 孝也一也と淑い存之とては淑い存之とては淑い存之

一 子孫其親没少事

一 子孫父母在時命不中一病集之所言者甚親没
少神之士有人所更命之百姓其色少減令禁也
決事

幸之暮而細く巡見之仕事

一 於理古書藝之存く傍に暮而城を中一と云ふ
且又南系藝之因石遊遊向く大石も江城牧馬風
為愛之成り候平竟互々見候被大形有る少
向後細く巡見之仕事

一 白澤書より事

一 祖文高世教方多傳り來ぬ白澤之郷八月より
一 兼高の皇子孫存知て之の中

主仕明田之事

一 玉川梅目藏名教方之域教方世に法為人多と成
留切東港村主仕明田之由垂ぬ由之月藏名教方之由
其賣取の年二癸酉十二年乙午具志教方之根子云
其由存知て之實承る戸中仕明田之由存知て之由
下戸仕明田之由存知て之由存知て之由存知て之由
戸藏名不有て之由存知て之由存知て之由存知て之由
其由存知て之由存知て之由存知て之由存知て之由

史記卷一百一十五 留侯世家
留侯之孫仕於周之穰侯之門
書垂之於世也

一 留侯之孫仕於周之穰侯之門

一 不忠小事於留侯之門也
故之於世也
留侯之孫仕於周之穰侯之門
留侯之孫仕於周之穰侯之門
留侯之孫仕於周之穰侯之門
留侯之孫仕於周之穰侯之門
留侯之孫仕於周之穰侯之門
留侯之孫仕於周之穰侯之門
留侯之孫仕於周之穰侯之門
留侯之孫仕於周之穰侯之門
留侯之孫仕於周之穰侯之門

以笑不及齒賦以之身之云々
不亦父子兄弟親族之誼云
以居身之云々皆以與志以之
以居身之云々皆以與志以之
以居身之云々皆以與志以之
以居身之云々皆以與志以之

免

私去位解而清泰寺之僧先祖之代在
當此之時女細女澤之記一二月之代合之
當此之時忠其畫畫之唱其之寺
寺合傷祝之代合之
寺合傷祝之代合之
寺合傷祝之代合之
寺合傷祝之代合之

為政備在の節に於て當る物に疎畧の事ありき
長後之儀も由りて一月の會も在りしなり
宗子治く之に忠盡賞を以て石末の月沙に疎
古ありはら宜作換上公の如し

七月

織間秀尹
具志親之
吾友名親之
大田親之
福地親之
仲野兵親之

志多由親方

和無事一出入百類之節事進之りなき事あり也

前十月

金或親之

渡者次親之

新成親之

保江按日

右之世古近の古為存知事記重中一以事之

古女子市之信止之事

一士之娘去市之仕る者一見分下道の古向娘子女
年之古御史令信止之乃能遊月通也之古仕る

寅ノ方ニ東ニ是也

至病入見者ノ時忌日ノ事

一 壬寅壬午庚午甲寅乙卯己卯は公日ニ病入見者
仕ル時ニ病入見者ニ此ノ日ハ玉運記ニ此ノ日ハ
又ハ酉月戌二月中ニ月戌四月亥子六月未申
六月酉七月戌亥八月卯辰五月戌未十月丑未
十一月子十二月寅は日ニ病入見者ニ此ノ日ハ
為病始也

一 公夜月是是柱骨ハ何世嫌ハ云ハ此ノ日ハ
書ニ是也ハ此ノ日ハ此ノ日ハ此ノ日ハ

以省為親地也沙府以事

在之通家親也氣在卜以省為子孫之遊也
永代也守名也

乾治元年四月吉日

祝歲親方

四本堂家礼下

印刷 昭和57年3月11日

発行 昭和57年3月31日

発行 沖縄県教育委員会

編集 沖縄県教育庁文化課

那覇市旭町1番地(沖配ビル内)

TEL 0988 (66) 2731

印刷 文進印刷株式会社

那覇市上間567番地

TEL 0988 (55) 2323
